

眼前の怪異

夏川 宙

眼前の怪異

眼前の怪異

「……近所で起きた猟奇殺人事件。怖いわねえ」

母が、とても強張った顔で言った。

「ほんと。——ベッドで被害者の首を切り落として殺すなんて、異常よ！」

憎しみを込めた言葉を、私が紡ぐ。

私は、翠原倫^{みどりのはらりん}。杉並区にある女子高校の2年生。バレエ部に所属する、普通の女の子。

居間でテレビを見ながらお茶していた母と弟に、シャワーを浴びた後、加わったの。

「殺された時、被害者は寝てたの？」

と、コーラのはいつたグラスをガラステーブルに置いて、中3の弟。

「目を見開いて、亡くなってたそうよ」

洗面で、母が答える。

「うわ——っ！ 怖っ！ 首を切断されてから15秒くらいは、ものを見る事が

出来るそうじゃん。被害者は、自分の首無し^{からだ}体を見たかも」

「ちよつと！ やめてよっ！ 夜中、トイレに行けなくなるじゃん」

眼前の怪異

私は、恐怖で、少し落ち着きを失ってしまった。

「……犯人は人間じゃなくて怪物だって、目撃者は言ってるみたい」

「怪物なんて、いるわけないじゃん。……夜の闇と犯人に対する恐怖で、見間違えたんじゃない？」

「だろうね」

やんちや坊主が、私に同調した。

「多分そうね。……まさか、家族の誰かが被害者と同じ目に遭わされるとは思わない

けど、早く犯人が捕まって欲しいわ」

真摯^{しんし}な口調で、母が言う。

「うん」

「だね」

「……明日は、バレーボール全国大会地区予選、対旭^{あさひ}高校戦。——もう、寝る」

「おやすみ」

「おやすみー」

私は、居間を出て、濃い茶色の木製階段を登った。

この家は、杉並区の閑静な住宅街にたつ、築13年の一戸建て。

私の部屋は、2階なの。

眼前の怪異

「……これでよし、と」

目覚ましをセットし終えた私は、自室の電気を消した。

猟奇殺人犯への用心のため、雨戸を閉めてるから、ほぼ真つ暗闇だ。

と言つても、熟知した私の部屋。

身をひるがえ翻して4歩ほど進み、ベッドの、淡いピンク色シートにするりと潜り込んだ。

「おやすみなさい」

私は、目を閉じた。

……ガタツ。

大きな物音が、聞こえた。

発生源は、おそらく、この部屋の壁の真下、屋外、私の家の敷地内。

「何？ ……まさか、猟奇殺人犯じゃないわよね？」

恐怖が、じわじわと私の心を蝕んでいく。

私は、瞼をおろしたまま、少し様子を見ることに決めた。

物音一つしない。

……怖いなあ。

雨戸は閉まつてるし、家には母も弟もいる。

眼前の怪異

大丈夫だと思うけど、猟奇殺人犯がほんとに怪物だったら、私には分からない方法で、この部屋に入り込めるかもしれない……

って、怪物なんて、いるわけがないじゃん。

大丈夫、大丈夫よ。

私は、懸命に、自分を安心させようとした。

……ニヤ——ツ。

「猫か。……脅かさないでよ！」

喉渴いちゃった。ミネウオ飲も。

……よく考えると、猫の鳴き声はしたけど、さっきの騒音をたてたのが猫とは限らない。

猟奇殺人犯かもしれないわ。

そして、猟奇殺人事件の被害者は、ベッドで、目を見開いた状態で首を切断されたらしい……

“私が目を開けると目の前に怪物がいて、いきなり首を刎ねられる”なんてパターンはないよね？

う——つ。怖い……

鼓動が速くなり、手に冷や汗が滲み出てきた。

眼前の怪異

……大丈夫、怪物なんていないわよ。

私は、恐る恐る瞼を上げる。

……暗黒の中に、怪物はいない。

ほっ。——やっぱり、怪物なんているわけないよね。

念のため、怖いけど、暗くて見にくい部屋の中を見回す。

「……ふう。怪物はいない」

私は、半身を起こして、読書灯をつけた。

ガラス製サイドテーブルに置かれた、ミネウオペットボトルを手に取り、ゴクゴクと胃へ流し込む。

……美味しい。生き返る。

「早く寝なきゃ」

さっきの騒音が何であるか、堅く確認する必要は無いでしょ。

楽観的に考えて、私は、ライトを消して横になり、目を閉じる。

視界が、黒く染まった。

……ドンッ。

又しても、うるさい音。

眼前の怪異

今度は、この部屋の壁の上あたりから、聞こえた。

何よっ！ 早く寝ようと思ってるのに！

怪物かもしれないけど、さつきと同じで、問題無いわよ。

深く考えず、何の音か確認するため、私は目を開けた。

「きや————つ!!」

私は、絶叫した。

闇の中、真っ赤なデコボコした気味の悪い皮膚、卵形輪郭、瞳の無い吊り上がった真っ黒い巨眼、剥き出しの汚れた白い乱杭歯らんぐいばという容貌が、私の眼前にある。

首を、冷感が疾走した。

次の瞬間、私は、鋭い鎌のような両手を持つ、男の人の姿に似た不気味な赤い怪物と、その下に横たわる、切断部から噴水のように鮮血を吹き出している、私の首無し体を見た……

眼前の怪異

せん。 本作品はフィクションであり、
実在のいかなる個人・集団・学校とも一切関係ありま

眼前の怪異

<http://p.booklog.jp/book/65420>

著者：夏川 宙

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/zcfzv5dyrd/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/65420>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/65420>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパブー (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社ブックログ